ガーネットの花言葉

満月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガーネットの花言葉

【Ｎコード】
Ｎ６２８８Ｉ

【作者名】
満月

【あらすじ】
あいつが贈った花言葉はなんだったんだ？
それほどまでに彼女を釘付けにする花言葉は・・・なんだ？

プロローグ

君の贈る花言葉は

彼女を喜ばせることが出来る？

ガーネットの花言葉

〜　変わらぬ思い　〜

不思議

「シリウス様、ここが分からないの・・・どうした解けるかしら？」
ブロンドの髪の女は大きくブラウスのボタンを開けてシリウスの腕に胸を寄せた。
シリウスは何も動じないでそのまま肩に腕を回して解き方を教えようとした。
が、ブロンドの髪の女がシリウスにキスをした。

「シリウスッ」
「んっ！！？」

シリウスはすぐにその女を突き放すとそのまま図書室を走って逃げた。
思いっきり走って走りまくってスッと外の世界に出たシリウスは木陰に座り込んだ。

「はぁ・・・はぁ・・・」

シリウスがふっと顔を上げると夏の暑さに負けてか赤いロングヘアーの女と銀色のロングヘアーの女が湖の中に入って遊んでいた。

「エバンズと・・・誰だ？あれ・・・」

シリウスは知らぬ間にその木陰から立ち上がって少しずつ前へ前へと足を進めていった。

バシャンッ

「おわっっあああぁぁぁ！？」

シリウスは制服のまま湖に入って足を滑らせてその場で転んでしまった。
その瞬間クスクスという彼女達の笑い声が聞こえて、シリウスは恥ずかしくてそのまま俯いていた。
するとパシャッと水の中を歩く音が聞こえてシリウスが顔を上に上げると太陽の光と被るように銀色のロングヘアーの女の子がシリウスを見下ろしていた。

「大丈夫？入っちゃったらしょうがないよ、そのまま遊んでいけばどう？」

女の子はそういうとシリウスの腕を掴んだ。
シリウスは女の子を見つめたまま立ち上がって聞いた。

「俺の名前はシリウスブラック、お前の名前は？」
「よろしくシリウス、私はアリス」

アリスはすぐにリリーによって呼び戻されてしまった。
シリウスの目の奥にはその日一日アリスの姿が映っていた。

不思議

次の日、シリウスは談話室でリーマスとチェスをしていた。

「糞・・・リーマスお前強すぎだ・・・」

「君もそう言う割りに結構がんがんきてるけどね」

結局この勝負、リーマスの勝ちに終わった。

シリウスがブーブーいいながらソファに座るとリーマスもその後を続いてソファに座った。

リーマスが紅茶に砂糖を何杯も入れてジャリジャリと音を立ててスプーンでかき混ぜているときだった。

「僕のマイハニー！！！！！！！！！！！！！」

「キャーーーーーーーーーーーー来るな糞！！！！！！！！！！！！！！」

突然よく知った奴の声とそいつに襲われかけた奴の声が談話室中に響き渡った。

ドカッバキッグキッ

残酷な音が聞こえるなかシリウスは片眉をピクピクと痙攣させて、ピーターはその位置から見えるジェームズの悲惨な姿を震えながら見ていた。

ただ、リーマスだけは落ち着いてその甘い甘～い紅茶を微笑んですすっていた。

「リリー・・・僕の・・・マイ・・・ハ・・ニィ・・・・・」

ジェームズの死にかけの声を無視してリリーはそのまま女子寮への階段を上がっていこうとした。
しかし、シリウスがリリーを呼び止めた。

「おい、エバンズ」

リリーは一段上に掛けた足をそのままでシリウスのほうへ顔を向けた。

「なにかしら？」

今の状態は良くはない、リリーの機嫌がジェームズによってむちゃくちゃ悪くなっていた。

「この間一緒にいた銀色の髪の奴って今何処にいるんだ？」
「貴方には教えたくもないわ」

シリウスはガクッと俯いてソファに倒れこんだ。
リリーは少し機嫌がよくなったみたいでそのままトントントンとリズム良く階段を上がっていった。

ポリポリ・・・ポリポリ・・・ゴックン・・・ポリポリ・・・ゴックン・・・ポリポリ・・・

永遠と続くリーマスがお菓子を食べる音にシリウスはいらいらを募らせていた。

「どうしたんだい？そんなにいらいらして、これでも食べて気分を

落ち着かせなよ」

リーマスは知らないような顔で言った、しかし目は何でも見透かしているようだ。

「さっきから菓子ばっか食いやがって・・・・甘い匂いがこっちまできてるんだよ！！！！」

シリウスがそういうとリーマスはニコッと微笑んで甘そうなチョコレートをシリウスに差し出した。
シリウスは勿論それを受け取って投げ返そうとしていたみたいだけどシリウスが取る前にリーマスは手を引っ込めてソファから立ち上がった。
そして寮への入り口へ歩いていった。
すると寮の扉が開き、シリウスが探していたアリスが入ってきた。

「はいアリス、疲れたでしょ？これでも食べて休んでね」
「リーマス・・・あ、ありがとう」

リーマスは極上の笑みを浮かべてアリスに甘そうなチョコレートを差し出した。
アリスは困ったようでもなくてそのままチョコレートを受け取って食べた。

不思議

シリウスが後から怒ってリーマスに聞いた。

「なんでお前はアリスがここに戻ってくるってわかったんなら俺に教えなかったんだよ！！！」

「僕はただこの地図を見て冷静に君がなっていないから少しでも冷静に戻ればいいと思っただけなんだけどな」

「俺はずっとアリスを探してたんだ！お前はずっと隣にいて分かってたはずだろ？」

「だから君は地図が目の前にあるにも関わらずずっと自分の頭のなかで探してただけなんだろう？」

甘い甘い紅茶を飲みながらリーマスは落ち着いて話す。

シリウスはどたばたと話す。

するとそこへリリーがアリスを連れて降りてきた。

「貴方達！談話室から一番遠い部屋まで聞こえているわよ！！！いい加減にしたらどう！？」

リリーがそう一回言うとシリウスとリーマスはシン・・・と静まり返った。

リリーはその反応を満足そうに見るとアリスの手を引いてそのまま談話室を出て行った。

シリウスはリーマスに一度謝ると膝を抱えて三角すわりをした。

リーマスは甘い紅茶を飲み終えたようで机の上にあるチョコレートの包みをもう１０個も開けていた。

「おい、お前そろそろその甘いお菓子も卒業しないのか？」
「僕は一生このお菓子と一緒に生きていくんだ、そんなこと絶対しないね」
「はぁ・・・俺は一生この甘い匂いと共に暮らしていかないといけないんだな・・・？はぁ・・・」

シリウスはソファに寝転がると目を瞑った。
瞼を閉じると見えるのは真っ暗闇、シリウスはだんだんとその視界が白くなっていくのを見た。

ある程度夜中と分かる静けさがやってきたとき、シリウスは目を開けた。

「？」

目を開けると自分以外誰ももう談話室にはいなかった。
もう一度目を閉じてうっすらと目を開くと次は銀色の何かがちらちらと見えた。
そしてその銀色の何かがアリスの髪の毛だと気付いた頃にはもうアリスはいなかった。

「アリスか・・・？」

シリウスの体の上に乗っているタオルケットのようなものは確実に女物だった。
しかも微かにパッションフルーツの香りがした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6288i/

ガーネットの花言葉

2010年10月15日19時02分発行